【研究論文】

高等学校文学教材における主体的な読みの実証的研究
ー「わからない」を切り口としてー

田中　美有詩

1．はじめに

高等学校での国語の授業を思い返してみると、知識伝達型の授業が多く、教師の説明をノートに写すような授業が多かった。小学校や中学校の頃と比較すると、高校の現代文の授業の中で、授業の内容の記憶がほとんどなく、そのことが引っかかっていた。また、教育実習で高等学校へ行ったときに、生徒たちから「高校でやった文学の話の中で記憶に残っているものはない」と言われ、自分で様々なことを想像し考えながら読み解いていく文学の授業が、なぜ記憶に残らないのかと疑問を抱いていた。

知識伝達型の授業は、高校生たちの知識欲を刺激し、意欲をかきたてるという効果が期待できる。知識欲が刺激されることにより、知識の吸収が活発になることも予想される。その一方で、知識伝達型の授業では、生徒自身が考えることがほとんどなく、“自分で考える”姿勢を持てずにいる高校生たちの姿がある。PISA 調査において、自由記述の無答率が約 24%であったことからも、このことがうかがわれる。

“自分で考える”姿勢は、高校生たちがこれからの自分の人生を生きていくうえでの重要な力となる。小中学校までとは違い、高等学校では自分自身に対して責任が求められるようになる。“自分で考える”ことにより、その責任の重さや対処の仕方を見つけていく段階へと進んでいく。そして、高等学校卒業後には、自分の力で社会との関係をつくり、社会の中で生きていくことが求められる。

そこで、本研究では“自分で考える”姿勢を育んでいくために、「主体的」ということを取り入れていく。授業参観や文献を通して、「主体的」という言葉と出会うとき、その多くは「生徒の積極的な姿勢」と「自分で考える」という二点を支えとしていると感じるからである。そして、“自分で考える”

姿勢は一つの文章から様々なことを想像し、自分で考えながら読んでいくことが求められる文学教材において育っていくと考える。また、文学教材は自我に目覚める発達段階にいる高校生の内面を豊かに育んでいく役割も果たす。よって、本研究では文学教材における主体的な読みに注目する。

しかし、「主体的」であるためにはどのような構成要素が満たされなければならないのかという点が不明では、指導の方法を立てることはできない。構成要素が明確でなければ、「主体的」という言葉だけが先行し、生徒の実態が考慮されないからである。

以上をふまえ、本研究で考究する目的をまとめると、以下の5点となる。

1) 主体的な読みに関する実践・研究の史的整理。
2) 学習者が主体的であることに関する実践・研究の史的整理。
3) 実践・研究の史的整理から、主体的な読みの検討。
4) 実践・研究の史的整理から明らかとなった主体的な読みに必要な存在である「他者」に着目した国語科教育実践場面での臨床的検証。
5) 学習者の実態に着目した国語科教育実践場面での臨床的検証。

2．研究の概要

前述した5つの問題を解明するために,次のような研究の手順で構成した。第1章では、主体的な読みについての史的概観と検討を行い、史的整理と研究課題の設定を行った。第2章では、先行研究の中で主体的な読みについてのキーワードとなった「他者」に着目し、主体的な読みの実践的検証を行った。第3章では、高校生の主体的な読みの過程を分析する中で見えてきた「わからない」に着目し、主体的な読みの実証的検証を行った。

3．研究の実際

本研究で明らかとなったことは、学習者の「わからない」が主体的な読みを駆動するということである。

主体的な読みの史的概観から、主体的な読みには過程がある点と学習者の積極的な姿勢が求められるという点が明らかとなった。その一方で、高等学校における主体的な読みの先行研究の少なさ、主体的な読みの過程の

不透明さが課題としてあげられた。また、主体的な読みでは他者の存在が必要とされながらも、どういった他者と関わったときに主体的な読みが促進されるのかということについて未解明であった。そこで、まず本研究では他者に着目し、他者によって主体的な読みが促進されるという仮説のもと、実践的検証を行った。

他者に着目した実践的検証では、他者によって主体的な読みが促進されると仮説をたて、どの他者と関わったときに主体的な読みが促進されるのかを検討することとした。授業者・他の学習者・自己を他者と異なる他者を3クラスで設定し、実践を行った。実践を分析した結果、高校生という発達段階では先行研究で言われていた学習者の「自ら」という積極的な姿勢や叙述をもとにして読むという姿勢がある程度は身についていることと、他者を変化させても学習者の読みには大きな変化が生じないという二点が明らかとなった。学習者は他者が授業者・他の学習者・自己とどの他者であれ、学習者が書いた感想の量や質に大きな差は見られなかった。しかし、学習者は他者の存在を求めており、主体的な読みには他者の存在が必要であることが明らかとなった。また、学習者の感想文の分析から主体的な読みには、叙述の正確な読み取り・自分の思いの投影・自分の読みに対する省察と評価が主体的な読みを成立させる要件であることが明らかとなった。

他者による差が見られないとするならば、高校生は主体的な読みをどのような過程をたどって行っているのかという課題が生じる。そこで、主体的な読みの過程を観察する実証的検証を行った。検証の結果、学習者の「わからない」が主体的な読みを駆動することが明らかとなった。学習者が発する「わからない」に着目し、6つのタイプに分類し、それぞれのタイプにとって「わからない」がどのような役割を果たしているのかを分析した。タイプによって「わからない」が果たす役割はそれぞれであったが、「わからない」によって学習者たちはわかろうとする意欲が生まれ、「わからない」が読みを進めていくうえでの原動力となっているという共通点が示唆された。「わからない」を自身の課題として捉え、それを解決していこうとする中で主体的な読みが行われていたのである。そして、「わからない」を解決していく過程の中で、他者に着目した実践の中で明らかとなった主体的な読みを成立させる要件が関係していることも見えてきた。「わからない」という思いから、まず叙述を正確に読み取ろうとし、読み取ったことに自身

の思いや解釈を投影し解決しようとする、しかし、解決しようとすると新たな「わからない」に気づき、それが結果的に自分の読みに対する省察・評価につながっていたのである。

以上のことから、本研究の成果は、高等学校における主体的な読みは、「わからない」によって駆動することが明らかとなったことであるといえる。

4．今後への課題

本研究の今後への課題として、以下の三点をあげる。

(1) インタビュー調査の効果

本研究の調査方法の中で、学習者へのインタビューを用いた。第3章の実証的検証において、筆者は観察者として関わりインタビューを行ったが、第2章では実践を行っている。学習者にとっては、一度授業を担当したものがインタビュアーとなっており、その教育的効果の可能性が推察される。そのため、第3章の実証的検証が終了した三週間後に追調査を行い、学習者たちにとってインタビューがどのような効果を持っていたかを調査した。そこで、学習者たちから語られた内容は、一例ではあるが、以下のようなことであった。

・インタビューを受けたことによって、テストの点があがった。

・普段自分が考えないところまで、考えるようになった。

・どうしたら田中さんに伝わるのかということをよく考えていた。伝わったときは、嬉しかった。

・授業中、ワークシートを書きながらこれはインタビューで聞かれるかなと考えながら書いていた。

・自分の考えを持っていいんだ、大事にしていいんだと思うようになった。

これらの学習者たちの発言から、学習者にとってインタビューが教育的効果を持っていたことが推察される。そして、インタビューを行うことによって、学習者たちは自身が考えたことに対する省察を行っていることも考えられる。管見ではあるが、インタビューが一つの指導方法としての可能性を持っていることが示唆されたといえるであろう。今後、インタビューの指導方法としての可能性を検討していきたい。

(2) 主体的な読みへの教師の介入

本研究では、指導論を追求することを目的とせず、学習者の主体的な読みがどのような過程をたどるのかに着目して研究を進めてきた。その結果、「わからない」によって主体的な読みが駆動することが明らかとなったが、授業者が学習者の「わからない」をどのように扱っていけばいいのか、授業者がどのように関わっていけば主体的な読みへと発展するのかという検討にまではいたらなかった。

今後、授業者が主体的な読みにどのように介入していけばいいのかということについて検討していきたい。

(3) 読みの過程の獲得

本研究では、学習者の「わからない」から主体的な読みが駆動されるという成果を得た。しかし、「わからない」をどのように解決していけばいいのかと解決の手立てを持てずにいたり、「わからない」からどう自分の読みを発展させていけばいいのかがわからないままでいる学習者の姿も想定される。また、「わからない」ではなく「わかる」から主体的な読みを駆動させようとする学習者も存在するであろう。学習者たちがこのような課題を解決していくためには、自身の読みはどのような過程をたどるのかを知ることが必要となる。読みの過程を知ることによって解決策を得たり、自分で読み進めようとする意欲が生まれるからである。

今後、学習者が自分の読みの過程に気づくためには、どのような手立てが必要であるのかを検討していきたい。

5．最後に

私は現在、長野県内にある公立中学校に勤務し、中学1年生と2年生の国語科を担当している。目の前にいる生徒たちのパワーに圧倒されながら、日々奮闘している。

本研究では、研究対象が高校生であったが、現在は中学校の現場にいるため、中学生ではどのように主体的な読みが行われていくのかということを実践の場で今後検討していきたいと思っている。

【引用・参考文献】

引用文献

田近洵一　「文学の＜読み＞の教育における「主体」の問題－荒木・奥田論争をめぐって－」(『東京学芸大学紀要第２部門人文科学　第40集』pp.237-248)　東京学芸大学　1989

倉澤栄吉　『倉澤栄吉国語教育全集７　主体的な読み手を育てる読解指導』　角川書店　1988

丹藤博文　「他者と出会う－読みの教育における主体と行為」(『学芸国語国文学　第28号』pp.64-71)　東京学芸大学国語国文学会　1996

丹藤博文　「読むという葛藤－『よだかの星』の実践－」『日本文学　第46巻第8号』　日本文学協会　1997

麻生健人　「読み手の主体性を生かす読解指導－構造分析的観点を導入した「羅生門」の指導－」(『松山東雲短期大学研究論集　第30巻』pp.73-84)　松山東雲短期大学　1999

大槻明三　「主体読み　研究の歩みと課題（一）」(『日本文学　第11巻第4号』pp.497-505)　日本文学協会編集　未来社　1962

飛田多喜雄　『国語教育方法論史』　明治図書出版　1965

村上芳夫　『主体的学習－学習方法分析による教育』　明治図書　1975

村上芳夫　「主体的学習と子どものわかり方」(『現代教育科学　192号』pp.66-70)　明治図書　1973

北川倶美　「主体的な読みへの保証と学習活動－読みにおける個人の先行知識とその相互交渉」(『現代教育科学　319号』pp.67-69)　明治図書　1983

小川雅子　「教師と学習者の「主体的学び」をめぐって」(『全国大学国語教育学会発表要旨集　第103号』pp.238-239)　全国大学国語教育学会　2002

石塚裕人　「子どもが主体的に学ぶ国語科授業の研究－山野小学校６年間の研究－」(『児童教育研究　第13号』pp.13-20)　安田女子大学児童教育学会　2004

南隆人　「主体性を発揮させるために」(『教育科学国語教育　586号』pp.46-50)　明治図書　2000

中谷雅彦　「主体的な読み手を育てる授業の構造化－金子みすゞの詩をとりあげて」(『教育学研究紀要　第46集２号』pp.49-54)　中国四国教育学会　2000

増淵恒吉　「高等学校国語科のカリキュラム」(『国文学解釈と鑑賞　第15巻８号』pp.61-68)　至文堂　1950

田近洵一　「戦後教育としての「読解指導」－倉澤栄吉「主体読み」と沖山光「構造的読解」を中心に－」(『国語教育史研究　第8号』pp.52-62)　国語教育史学会　2007
田近洵一　『田近洵一＊講演集　[自立と共生]の国語教育　授業を変える視点』　光文書院　1996
後藤惣一　「文学教育における読者主体の読みと授業の構築」(『大分大学教育学部研究紀要　第10巻第2号』pp.285-300)　大分大学　1988
石井希代子　「主体的な「読み」の活動を促す授業の構築を目指して」(『国語教育研究　第46号』pp.30-38)　広島大学　2003
井出チカ子　「主体的に読み深めるための学習指導の工夫」(『愛媛国文と教育　第38号』pp.1-7)　愛媛大学教育学部国語国文学会　2005
鯨岡峻　『エピソード記述入門　実践と質的研究のために』　東京大学出版会　2005
鯨岡峻　『両義性の発達心理学　養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション』　ミネルヴァ書房　1998
丹藤博文　「教材『山月記』を読み直す」(『読書科学　第43巻第3号』pp.95-104)　日本読書学会　1999
細谷敦仁　「「書く」ことを重視した国語（現代文・古文）－長期派遣研修における実践」(『東京学芸大学教育学部附属高等学校紀要　40』pp.85-100)　東京学芸大学教育学部附属高等学校　2002
田近洵一　「「読み」の教育」(『児童心理　第37巻第13号』pp.15-23)　金子書房　1983
飛田多喜雄　『国語科教育方法論体系6　文学教育の方法論』　明治図書出版　1984
井上雅彦　「高等学校における文学の学習指導に関する実践的考察－近代小説を用い交流を重視した指導過程－」(『言語表現研究　第22号』pp.13-24)　兵庫教育大学言語表現学会　2006
文部科学省　『高等学校学習指導要領解説　国語編』　東洋館出版　1999
増淵恒吉　『増淵恒吉国語教育論集　中巻　読解指導論』　有精堂　1981
大矢武師　『高校国語教育の理論と方法』　明治図書出版　1977
阿武泉　「高等学校国語教科書における文学教材の傾向」『国文学解釈と教材の研究　第53巻13号』pp.34-47　學灯社　2008
髙木まさき　「『TUGUMI』の読み手」を読む（『＜新しい作品論＞へ、＜新しい教材論＞へ6』pp.102-121)　田中実・須貝千里編　右文書院　1999
倉石精一・苧阪良二・梅本堯夫編　『教育心理学』　新曜社　1971

石垣義昭　「中学・高校の小説の教育ー文学教育がひらくものー」(日本文学協会国語教育部会編『講座／現代の文学教育（中学・高校）小説編』pp.34-44) 新光閣書店　1984
松本修　「文学教材の＜語り＞の分析について」(『上越教育大学研究紀要　第17巻第1号』pp.147-158)　上越教育大学　1997
高山実佐　「「こころ」の授業再考」『日本語学　第23巻第8号』　明治書院　2004
佐藤真紀　「『夢十夜』「第一夜」試論ー語り手の問題を中心として」(『文学研究論集：文学・史学・地理学　第15号』pp.149-59)　明治大学大学院文学研究科　2001
寺崎賢一　「読書にひらく文学の授業ー『夢十夜（第一夜）から』ー」(『全国大学国語教育学会発表要旨集　第105号』pp.53-56)　全国大学国語教育学会　2003
須田千里　「「第一夜」の構造と主題ー非「ハッピー・エンド」の説」(『漱石研究　第8号』pp.166-176)　翰林書房　1997
平山満義編　『質的研究法による授業研究　ー教育学／教育工学／心理学からのアプローチ』　北大路書房　1997
藤森裕治　「読書感想文の学習指導に関する一考察ー「羅生門」の読みの指導を通してー」(『読書科学　第41巻第4号』pp.129-136)　日本読書学会　1997
斎藤喜博　『授業　子どもを変革するもの』　国土社　1963
佐伯胖　『「わかり方」の探求ー思索と行動の原点ー』　小学館　2004

参考文献

秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編　『教育研究のメソドロジー』　東京大学出版会　2005
秋田喜代美編　『授業研究と談話分析』　放送大学教育振興会　2006
芦田恵之助　『芦田恵之助国語教育全集　第7巻　読み方実践編　その一』　明治図書出版　1987
天岩静子　「児童・生徒の発達研究の動向」(『教育心理学年報　第43巻』pp.48-57)　日本教育心理学会　2004
阿武泉　「戦後高等学校国語科教科書教材の変遷」(『全国大学国語教育学会発表要旨集　第16号』pp.73-76)　全国国語教育学会　2004
飯尾博一　「主体的に学ぶ生徒の育成ー文学教材『蠅』と三分間スピーチの実践を通して」(『横浜国大国語研究　第12巻』pp.34-45)　横浜国立大学国語国文学会　1994
石原千秋　『国語教科書の思想』　筑摩書房　2005
井上雅彦　『伝え合いを重視した高等学校国語科カリキュラムの実践的研究』　渓水社　2008
大澤吉博編　『テクストの再生』　中央公論社　1994

大賀一夫　『主体性の心理と教育』　明治図書出版　1968
小谷修也　「高等学校における「読むこと」の指導について－現代文分野を中心に－」(『日本語学　第25巻第2号』pp.62-69)　明治書院　2006
梶田叡一　『〈自己〉を育てる－真の主体性の確立』　金子書房　1996
勝田守一編　『現代哲学全書11　教育学』　青木書店　1958
小林國雄　『高等学校　国語科教育の実践』　大修館書店　1981
西郷竹彦　『文学教育入門』　明治図書　1969
斎藤喜博　『授業入門』　国土社　1964
佐伯胖　『「わかる」ということの意味[新版]子どもと教育』　岩波書店　1995
柴橋裕子　「青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち」(『発達心理学研究　第12巻第2号』pp.123-134)　日本発達心理学会　2001
仁野平智明　「「黒い雨」の実践－表現に注目して理解を深める－」(『東京学芸大学附属高等学校紀要　36』pp.1-15)　東京学芸大学附属高等学校　1998
杉浦直也　「主体的に物語を読む学習活動をめざして－「羅生門」をともに読む－」(『横浜国大国語教育研究　第16巻』pp.1-13)　横浜国立大学国語教育研究会　1994
鈴木志郎康　「機能と意匠とそれを越えるもの－吉野弘論」(『現代詩手帖　第27巻第7号』pp.131-137)　世代社　1981
鈴木正幸　浅田豊　「主体的な学習者を育む教育の視点と方法に関する一考察」(『神戸大学発達科学部研究紀要　第6巻第1号』pp.67-75)　神戸大学発達科学部　1998
関谷由美子　「『夢十夜』の構造－＜意識＞の寓話－」(『日本文学　第47号第6号』pp.15-26)　日本文学協会　1998
髙木まさき　『「他者」を発見する国語の授業』　大修館出版　2001
田近洵一　『言語行動主体の形成－国語教育への視座』　新光閣書店　1975
田近洵一　「創造読みと作品分析－分析批評の限界を超えて」(『現代教育科学　29巻10号』pp.67-71)　明治図書　1986
田近洵一　『戦後国語教育問題史[増強版]』　大修館書店　1991
田近洵一　「国語科教育課程史上の転換点－「読む」の教育を中心に　経験主義・総合主義から能力主義・系統主義への転換」(『国語教育史研究　第1号』pp.67-79)　国語教育史学会　2001
田中耕司　小田真由美　山口真希枝　生駒忍　石田喜美　「授業における相互交流の機会は生徒の読みの変容にどのような影響を与えるのか－感想を手がかりとした読みの具体的変容の様相－」(『人文科教育研究　第32号』pp.63-77)　人文科教育学会

2005
田中実・須貝千里編　『＜新しい作品論＞へ、＜新しい教材論＞へ 1』　右文書院 1999
田中実・須貝千里編　『＜新しい作品論＞へ、＜新しい教材論＞へ 2』　右文書院 1999
田中実・須貝千里編　『＜新しい作品論＞へ、＜新しい教材論＞へ 5』　右文書院 1999
田村圭司　「I was born」(『国文学解釈と教材の研究　第 37 巻 3 号』pp.110-112) 學灯社　1992
丹藤博文　「文学教育における＜感動体験＞とは何か」(『読書科学　第 35 巻第 1 号』pp.25-33)　日本読書学会　1991
丹藤博文　「批評行為としての＜盲点＞の読み」(『日本文学　第 42 巻第 8 号』pp.27-35) 日本文学協会　1993
丹藤博文　「テクストの＜空白＞とその読み」(『読書科学　第 38 巻第 2 号』pp.58-66) 日本読書学会　1994
丹藤博文　「他者と出会う－読みの教育における主体と行為」(『学芸国語国文　第 28 巻』pp.64-71)　東京学芸大学国語国文学会　1996
丹藤博文　「読むという葛藤－『よだかの星』の実践－」(『日本文学　第 46 巻第 8 号』pp.48-57) 日本文学協会　1997
丹藤博文　『他者の言葉　文学教育における批評行為の成立』　学芸図書　2001
丹藤博文　「他者を読む－高校における『ごんぎつね』の授業－」(『日本文学　第 51 巻第 8 号』pp.51-60)　日本文学協会　2002
丹藤博文　「他者の領分－『高瀬舟』の授業から」(『日本文学　第 54 巻第 3 号』pp.2-9) 日本文学協会　2005
徳永光展　「夏目漱石「夢十夜」における「自分」の考察」(『山口国文　第 17 巻』pp.35-43)　山口大学文理学部国語国文学会　1994
中西淳　「文章表現指導の生成論的研究－書き出すまでの内的過程の考察－」(『広島大学教育学部紀要第二部　第 40 号』pp.47-53)　広島大学教育学部　1991
中西淳　「文章表現指導の生成論的研究－構想を中心として－」(『広島大学教育学部紀要　第二部　第 41 号』pp.13-19)　広島大学教育学部　1992
野地潤家　『読解指導論－琴線にふれる国語教育－』共文社　1973
野地潤家　『国語教育史資料　第一巻　理論・思潮・実践史』　東京法令出版　1981

野村由香理　「吉野弘の詩について－国語教材としての考察－」(『国文研究と教育 第 8 号』pp.29-40)　奈良教育大学国文学会　1985
飛田多喜雄　『国語科教育方法論体系 8　鑑賞指導の方法』　明治図書出版　1984
飛田多喜雄　『続・国語教育方法論史』　明治図書出版　1988
平沼孝之　「「他者」のディスクール　その一『夢十夜』第一夜・第三夜を読む」(『清泉女子大学人文科学研究所紀要　第 15 巻』pp.99-127)　清泉女子大学人文科学研究 1993
藤井知弘　「読者反応研究から授業化への視点」(『国語科教育　第 47 巻』pp.25-32)　全国大学国語教育学会　2000
細谷俊夫・仲新編　『教育学研究入門』　東京大学出版会　1968
益地憲一　『大正期における読み方教授論の研究－友納友次郎の場合を中心に－』　渓水社　2008
増淵恒吉　「近代小説の学習指導案」(『国文学解釈と鑑賞　第 16 巻 11 号』pp.62-64)　至文堂　1950
増淵恒吉　「「こころ」の学習指導」(『日本文学　第 15 巻第 7 号』pp.61-74)　日本文学協会　1966
松岡繁　「学習指導要領（国語科）の成立と展開－高等学校を中心に－」(『松山大学論集　第 17 巻第 5 号』pp.226-270)　松山大学　2005
松本修　「読みの分岐点と読みの交流活動」(『表現研究　第 82 号』pp.70-80)　表現学会　2005
松本修　『文学の読みと交流のナラトロジー』　東洋館出版　2006
松元季久代　「『夢十夜』における「自分」の転位－漱石のキュービズム」(『国文学解釈と教材の研究　第 39 巻 2 号』pp.107-112)　學灯社　1996
宮本浩治「文学の授業における学習者の主体性」(『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部（文化教育開発関連領域）　第 51 号』pp.129-136)　広島大学大学院教育学研究科　2002
茂呂雄二　『実践のエスノグラフィ』　金子書房　2001
山元隆春　「読むという出来事を誘う力－＜誤読＞の豊かさについて」(『日本文学 第 45 巻第 1 号』pp.49-57)　日本文学協会　1996
山口比砂　「夏目漱石『夢十夜』物語連鎖の構造－潜在する＜語り手の物語＞－」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集　第 6 巻』pp.280-261)　愛知県立大学大学院国際文化研究科　2005

やまだようこ編　『質的心理学の方法　かたりを聞く』　新曜社　2007
山中哲夫　「夏目漱石『夢十夜』の精神分析的解釈－「第一夜について」(1)－(『愛知大学文学論業　第133輯』pp.59-85)　愛知大学　2006
山中哲夫　「夏目漱石『夢十夜』の精神分析的解釈－「第一夜について」(2)－(『愛知大学文学論業　第134輯』pp.73-90)　愛知大学　2006
好井裕明・山田富秋・西阪仰　『会話分析への招待』　世界思想社　1999
吉野弘　「言葉は誰のもの？」(『現代詩手帖　第21巻第9号』pp.98-99)　世代社　1978
H.Rヤウス　轡田収訳　『挑発としての文学史』　2001
ヴォルフガング・イーザー　轡田収訳　『行為としての読書』　岩波書店　2005

(たなか　みゆし　飯山市第三中学校)